



FUJITSU

Fujitsu Future Insights

モビリティの
未来

shaping tomorrow with you

社会とお客様の豊かな未来のために

未来のモビリティ



ジャックは、都市圏に本社を構える製造企業でマネージャーをしています。会社から通勤に1時間ほど要する郊外の町で、同い年の妻アナと娘のルーシー、息子のオリバーの4人で暮らしています。

ジャックは普段は自宅でテレワークをしています。この日はちょうど出勤日でした。登録している乗降スポットから自動運転バスに乗り込み、会社の近くを巡回している別の自動運転バスに乗り換え、オフィスに到着。午後からの取引先訪問の予定に合わせて、AIエージェントがロボタクシーを手配してくれました。昼過ぎにオフィスを出ると、ちょうどタクシーが到着しており、すでに目的地が設定されていて、自動で動き出します。移動中はタクシーに備え付けの端末から会社の会議システムにアクセスし、チームメンバーとミーティングを行います。移動がダイナミックに最適化されるよ

うに道路システムがデザインされ、自動車どうしがコミュニケーションしながら走行しているので、渋滞もなく、スムーズに移動できました。打合せが終わり、今日は直接自宅に帰ります。架線がないので気付きませんでした。AIエージェントの提案に従って2分程度歩くと次世代型路面電車システム(LRT)の駅がありました。LRTには、手のひらを扉の前でかざすと乗車でき、降車駅で自動的に停車し、料金がリアルタイムに引き落とされます。

日曜日の朝、今日は以前からルーシーが行きたいと言っていた海辺の街へ家族で出かけます。予約していたシェアリングカーが自宅前に到着し、乗り込んで認証すると、ドライブ中や行き先でのおすすめスポットを教えてくれ、わくわく感が高まります。家族で楽しくおしゃべりしながら、自動運転で快適に移動。お昼時には、シェアリングカーを降りて、レ



レストランまで海辺の街並を楽しみながら散歩します。途中、オリバーが道路に飛び出してハッとしましたが、走行している自動運転車は瞬時に停止し、事故は回避できました。海水浴を楽しんだ後は帰宅するため、別のシェアリングカーを手配します。目いっぱい楽しみましたが、移動の疲れは全く感じませんでした。

ジャックの両親は、息子家族の家から自動車で1時間程度の自然豊かな田舎町で、老後の生活を楽しんでいます。自動車に乗らなくなってからは、通院や買い物を日に3本しかないバスに頼っていましたが、それも過去の話。今では遠隔医療システムで毎回病院に通う必要がなくなり、月に一度の通院も、自動運転車による病院の送迎サービスを利用しています。買い物は、VR(仮想現実)技術を使ったネットスーパー

のおかげで、店舗に行った感覚で、自宅に居ながら何でも手に入れられるようになりました。

今夜は、友人夫婦と一緒にディナーを取ることになっています。レストランは歩いて15分程度なので、自動運転パーソナルモビリティ¹に乗って現地に到着。楽しいひとときを過ごしました。家に帰ると、孫からTV電話が入りました。「来週遊びに行くね!」と言われたので、迎えの自動運転車を予約。会う日が待ち遠しいです。

1 パーソナルモビリティ：1人～2人乗りのコンパクトな移動支援機器。歩行者と既存の乗り物の間を補完する目的で開発された個人向けの移動ツールであり、人が移動する際の1人当たりのエネルギー消費を抑制するという意図のもと、従来の自動車とは一線を画した移動体として提案されている。

Fujitsu Future Insights モビリティの未来

初版 2019年3月

CONTENTS

- 序章
- 2 未来のモビリティ
- 第1章
- 4 人類にとっての移動
- 第2章
- 7 モビリティの潮流
- 第3章
- 13 富士通とモビリティの未来

Fujitsu Future Insights

富士通は、テクノロジーを活用してビジネスや社会がどのようにイノベーションを起こしていけるのかについてのグローバルな未来ビジョンをまとめ、Fujitsu Technology and Service Visionとして毎年発行しています。Fujitsu Future Insightsは、特定の分野における変革の課題やテクノロジーが及ぼす影響をより深く分析し、その分野の未来のシナリオと戦略を提言しています。

ウェブサイト

Fujitsu Technology and Service Vision
<http://www.fujitsu.com/jp/vision/>

Fujitsu Future Insights モビリティの未来
<https://www.fujitsu.com/jp/vision/insights/wp2/>

人類にとっての移動

なぜ人は移動するのか

人類は、約20万年前にアフリカで誕生したと言われてい
ます。その後世界にどのように拡散していったかは様々な説
がありますが、これほど広く地球上に拡散した動物は人類の
他になく、人類が「ホモ・モビリタス」(移動するヒト)と
呼ばれる所以となっています。

世界各地に広がった後も、人類は移動を繰り返していま
す。紀元前四千年ころから、サハラ北方の乾燥化が進み、
かつてこの地方に住んでいた人々を南へ押しやりました。東
南アジアに住んでいたポリネシアの人々はカヌー等航海技術
を活かし太平洋の島々に移住し、航海技術とともに、焼畑を
使った根栽農耕や家畜の飼育をこの地域にもたらしました。

4世紀末から6世紀初頭のゲルマン民族の大移動は、西進
してきたアジア系遊牧騎馬民族に圧迫されたことによると
言われていますが、耕地不足を解消する必要性が背景にあっ
たとの見方もあります。

15世紀から17世紀にかけての大航海時代、遠洋航海術の
発達や、香辛料等の需要増大、布教熱の高まりがある中、
まだ安全とは言えない「移動」を後押ししたものは、内側から
沸き上がる未知への好奇心、実際に体験する喜び、という人
類の特性であったとも考えられます。「移動」が多様な文明、
文化、産業を生み出し、さらなる「移動」に駆り立てています。

人が移動する理由は、自然環境の変化、政治的な問題、食
料の獲得、経済的発展など、多種多様ですが、「知らないと
ころに行ってみたい」、「実際に行ってみたい、会いたい」と



紀元前4000年

ポリネシアの人々が
航海技術を活かし
太平洋の島々に移住



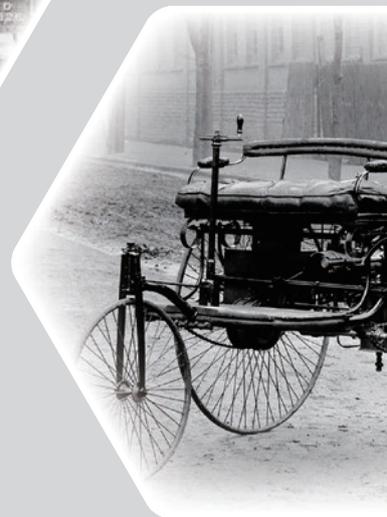
1825年

蒸気機関車で最初に公共鉄道で
走行したロコモーション号



15-17世紀 大航海時代

1492年、コロンブスが
アメリカ大陸を発見



いう好奇心が、人が移動する根本的な欲求であることは、昔も今も変わらないのではないのでしょうか。

発達した移動手段と副産物

1814年ジョージ・スティーブンソンが蒸気機関車の初走行に成功し、1885年ダイムラーとベンツが自動車を開発しました。1903年にはライト兄弟が世界初の有人飛行に成功するなど、産業革命をきっかけに多くのイノベーションが生まれ、現在の移動手段の基本ができました。その後、社会インフラとしての交通網整備が進み、車・鉄道・飛行機など移動手段が発達して、「より速く」、「より遠くに」、「より安全に」、「より多くの人」が移動可能となりました。移動手段の発達により、経済・社会は発展し、私たちが得られる体験・知識も

増え、人生も豊かなものになっています。

他方、大量輸送の実現は、社会に問題ももたらしています。自動車や航空機による二酸化炭素(CO₂)排出などの環境負荷増大、交通事故や死亡者の増加、渋滞の慢性化、地域間の移動が増加したことによる疫病の伝播などです。

また、先進国と発展途上国、都市と過疎地域の間には、交通手段発達によって得られる恩恵に格差が生じています。例えば、過疎地のように利用者が少ない地域では、経済合理性から公共交通サービスの提供が難しくなり、自家用車すら運転できず生活に必要なサービスを受けることができない「移動難民」が発生しています。誰もが自由に移動できない状況は、世界各国で高齢化が進む将来、さらに深刻になると考えられます。

1903年

ライト兄弟が世界初の
有人動力飛行に成功



1885年

ダイムラーと
ベンツが車を開発



ヒューマンセントリックなモビリティ

産業革命以降、自動車や鉄道といった業界ごとに、企業や公共機関が、より高速でより多くの人やモノを運ぶ移動手段を提供してきました。

今、デジタル技術を活用することにより、この風景を一変させる変革(デジタル・トランスフォーメーション)が起こっています。自動車については、「ネットワークにつながる」、「自動運転になる」、「活用形態は所有から利用へシフトする」、「動力がガソリンから電力になる」という変革が加速度的に進行しています。

この変革は私たちに何をもたらすのでしょうか? 人が本当に必要としているのは、自動車という形をしたモノではなく、A地点からB地点に最も快適に効率よく移動できるという「モビリティ」というコト(体験価値)です。そして、移動に関連する多様な情報が全てリアルタイムでデータ化されることにより、従来の業界を隔てていた壁はなくなり、複数の業界をまたがるエコシステム(ビジネスの生態系)に再構成されていきます。自動車・鉄道・タクシー・電力など、様々な

業界に属する企業や組織がデジタル技術でつながった新しい自律分散型のエコシステムを形成し、ヒューマンセントリックなモビリティ社会を共創することが現実のものとなっていきます。この変革は、様々なビジネスにとって大きな成長機会であると共に、既存の業界の枠組みに閉じたビジネスに対しては脅威ももたらしています。なぜなら、ベンチャー企業や全く異なる業界に属する企業が新たなモビリティサービスに参入することも可能だからです。しかし、この変革を経て、人々にとって快適で、利便性の高いヒューマンセントリックなモビリティ社会がもたらされるのです。

私たちは、「Fujitsu Technology and Service Vision」の中で、デジタル技術がどのようにビジネスや社会を変革していくのか、様々なヒューマンセントリックな価値をどのように共創できるかについて、未来ビジョンを発信しています。この「Fujitsu Future Insights モビリティの未来」では、モビリティに関する大きな潮流をご紹介しますと共に、より良いヒューマンセントリックなモビリティ社会の実現に向けた提言を行っています。



サプライセントリック



ヒューマンセントリック

モビリティの潮流



私たちは、多様なモビリティサービスを生み出していくことにより、持続的な経済成長を実現し、困難な社会課題を解決に導く可能性を手にしています。この章では、今すでに起こりつつある、6つのモビリティの潮流をご紹介します。



モビリティの「都市化」
モビリティによる都市の再創造



モビリティの「民主化」
誰もが利用でき、提供できるモビリティ



物流の「ロボット化」
人が介在しないモノのモビリティ



体験価値としての移動
移動をより楽しく、より魅力的に



「移動しない」移動
物理的移動を代替するモビリティ



自然生態系に調和するモビリティ
地球と共生するモビリティ



モビリティの「都市化」
モビリティによる都市の再創造

多くの人が生活し、活発な経済活動が行われている都市では、自家用車・タクシー・バス・鉄道など様々な移動手段が提供されています。一方で、交通需要の増大は渋滞などの問題も引き起こしており、渋滞の解消は重要な都市課題となっています。

また、移動する人々の需要と各移動手段のサービスが連動していないことによって、局所的に需要過多・供給過多が起こることも都市交通の問題点となっています。昨今では配車アプリやライドシェアサービスを使い、稼働中のタクシーの情報を利用者に伝えるサービスも大都市圏では広がりつつあります。しかし、多くの人にとって、都市を快適に移動することはまだ難しいと言えます。

近い将来、自動車の活用形態が所有から利用へと変わり、コネクテッドカーや自動運転車が普及すると、自動車も鉄道やバスと同様に公共交通サービスとして社会インフラの一部となり、全ての移動サービスがデジタル情報で統合管理できる社会がやってきます。そうになると人は、いつでもどこでもネットワークを介して最適なサービスを自由に選択できるようになります。



自動運転技術を使ったロボタクシーやシェアリングカーは、誰でも移動したいときに使えるオンデマンドでのサービスを可能にします。また、交通状況をリアルタイムに把握し交通管制を行うモビリティ・マネジメントによって、これまで避けられなかった渋滞の解消によるスムーズな移動と都市全体のモビリティ・インフラの稼働率最適化の両方を実現することも不可能ではありません。一部の都市では、公共交通としての自動運転車を組み込んだモーダルミックス²やライドシェアサービスの実証、実装がすでに始まっています。富士通でも、シンガポール科学技術庁(Agency for Science, Technology and Research, A*STAR)とSingapore Management Universityと共に先端研究組織を設立し、都市における交通渋滞の緩和や歩行者の動線改善、さらには物流や港湾・海上交通の最適化などを行うソリューション開発を目的とした共同研究を行っています。

重要なことは、これらの新しいモビリティサービスを活用することによって都市の持続可能性を高め、未来に向けて都市を再創造できる大きな機会を人々が手に入れたということです。新しいモビリティサービスによって、誰もがストレスなく移動できる範囲はこれまでよりも大きく拡大します。これにより、都市中心部と郊外や、働くエリアと居住エリアなどについて、これまでとは異なる都市デザインも可能に

なります。新しいモビリティサービスは、都市における様々な活動をつなぎ、持続可能な都市の実現を支えていきます。



モビリティの「民主化」

誰もが利用でき、提供できるモビリティ

現在自動車を所有・維持するための経済力がない人々や自動車を自ら運転できない人々は、公共交通機関に頼らざるを得ません。また、経済発展途上の地域や過疎地では、交通インフラの整備・維持が難しく、公共交通サービスを十分に提供することができていません。このように、個人や地域で、人が移動する能力に格差が生まれているのが現状です。未来のモビリティサービスは、この格差を埋めることを期待されています。

例えば、自動運転技術によって、運転に自信のない高齢者でも安心して自動車を活用できるようになります。自動車の公共交通化やシェアリングサービスの一般化により、自動車を所有しなくても、オンデマンドで安価な移動手段を得ることができます。自動車を所有したい人にとっても、パーソナルモビリティの登場により、比較的安価に移動手段を確保することができます。

統合的な運行管理システムに組み込まれたロボタクシーや

² モーダルミックスとは多様な交通機関との連携を図り、交通機関の特色にあわせて手段を混在させるという考え方。特に、自動車・トラックと鉄道・海運との結節点を強化しようとする考え方。マルチモーダルともいう。運輸省(現国土交通省)が提唱。

シェアリングカーサービスが実用化されると、公共交通サービスも安価に提供できるようになり、過疎地域など経済合理性が低かったエリアでも移動の選択肢を用意することができます。

このようなサービスの社会実装は、すでに動き始めています。福島県伊達市では2018年、富士通の位置情報活用型クラウドサービスを利用して、地域住民助け合いによる遊休車両を利用した乗合送迎サービスの実証実験を行いました。運転手となる地域住民の送迎可能な時間や現在位置と、利用者の目的地から、最適な車両をマッチングさせることで、遊休車両を活用した低コストでの運用と、地域住民への安全な送迎サービスの提供を両立するもので、既存の公共交通インフラに頼らない新たな持続可能な移動手段として期待されています。

このように、モビリティサービスを楽しむために個人や社会が負担していたコストが劇的に下がり、誰もが平等に移動できる力を手に入れることができますようになります。

また、モビリティの「民主化」は、サービスを受ける側だけでなく、サービスを提供する側にも訪れます。モビリティサービスを、自動車というハードウェア資産と切り離して誰もが提供することが可能になり、例えば、自分が所有する

自動車を用いて、ライドシェアサービスを行ったり、スーパーマーケットが地域巡回バスサービスを開始したりすることが容易になります。世界各地でスタートアップ企業がデジタル技術を活用した配車サービスやシェアリングサービスを展開しており、モビリティサービス提供側の民主化はすでに始まっています。さらに、モビリティ・プラットフォームを活用して、流通やエンターテインメント、健康や福祉など、多様な隣接産業がエコシステムを形成し、新しいサービスを開発することも可能です。良いアイデアとやり抜く力があれば、誰もがイノベーションに挑戦することができるのです。



物流の「ロボット化」

人が介さないモノのモビリティ

モビリティエコシステムへと再構成されるのは、「人の移動」だけではありません。「モノの移動」、つまり物流も対象となります。

昨今、ネットショッピングや個人間取引の増加によって、小ロットの宅配物流が爆発的に増加しています。売上に対して手間が大きい小ロット物流が増加したことにより、物流業界は人材不足とコスト増が大きな問題となっています。



モノを目的地まで届けるためには、拠点と拠点を結ぶ幹線物流と、拠点から最終配達先までの配送を複合的につなぐ必要があります。幹線物流は縦列・自律走行トラックなどの登場で、大量の荷物を効率的に運ぶことができるようになります。物流拠点では、幹線物流から、末端配送(ラストワンマイル)用のドローンや、自動宅配トラックなどに自動で積み替えられ、目的地までほとんど人が関与せず運ぶことが可能になります。

日本では、複数メーカーのトラックを協調型車間距離維持支援システムでつないだ隊列自動走行の実証実験が2018年に行われています。完全自動運転技術の普及を待たずして、ドライバー不足の解消や事故の軽減と、大量輸送の両立が期待されています。

高齢者や過疎地域の移動困難な人向けには、小口の宅配だけでなく、訪問診療、移動するコンビニなど、目的地が移動して利用者に近づくという新しいサービスが構築されつつあります。今後さらに自動運転が一般化すれば、小売、サービスの移動店舗化や宅配サービスの多様化が進むでしょう。

このように物流全体がほぼ自動化されることにより、需要発生、配送計画、目的地到着まで、モノの位置や物流工程・システムの稼働状況など様々な情報をデジタルで把握するこ

とが可能になります。これらの情報をAIや量子原理を使ったコンピュータが解析し、サプライチェーン全体で最適な運行を行うよう指示を出します。

モノを運ぶ「手足」と最適な配送計画を考える「頭」、いずれも人から機械に置き換わる物流の「ロボット化」が進展しています。すでにこの自動宅配サービスの実用化を目指し、各地で実証実験が行われています。



体験価値としての移動

移動をより楽しく、より魅力的に

「旅行がしたい」「ドライブに行きたい」「移動を楽しみたい」。人にとって移動は過程そのものが目的になることがあります。未来のモビリティサービスは、移動をより楽しく、魅力的な体験に変えてくれます。例えば、自動車に備わったAIエージェントが、趣味嗜好や家族構成、気分や場所に応じた提案を行ってくれます。人々は自動車に乗り込み、AIエージェントと対話しながら、楽しく、魅力的な移動を体験することができます。もちろん移動中は、ハンドルを持つ必要もなく、安心して景色や会話を楽しむことができるようになるでしょう。





自動車がネットワークにつながり、自動運転が人を運転から解放する世の中では、もはや自動車はSIMフリーのスマートフォンと同じようなものだと考えることができます。自動車に乗るとまず利用者のID情報を読み込ませ、利用者に応じた環境設定、レコメンデーションが行われます。スマホと同様に、自動車のダッシュボードモニターで車の特徴を活かしたアプリケーションサービスを選択することで、さらに楽しい経験を得ることができるようになるでしょう。現時点では安全性の問題から、エンターテインメントやコミュニケーションなど情報サービスに限定されていますが、高度安全運転技術やオンラインでの車載ソフトウェア更新技術がさらに発展することで、提供サービスは拡大すると思われる。



「移動しない」移動

物理的移動を代替するモビリティ

「実際に行って見たい、会いたい」など、物理的な移動が必要な場合もありますが、全てがそうではありません。ビデオ会議やテレワークをすること、ソーシャルネットワーク上のゲームをプレイすることはもう当たり前になってきました。今後さらに高度化する仮想現実(Virtual Reality : VR)や拡張現実(Augmented Reality : AR)、あるいは人の五感や感情

を理解する次世代コンピュータなどのデジタル技術を活用することで、私たちはリアルに移動することに加えて、時間や空間の制約を超えてバーチャルに移動する選択肢を得るようになります。

例えば、国際会議を仮想空間で行えば、誰でも簡単に参加できるようになります。遠隔地から、難病の専門医の診療を受けることも可能になり、どこでも誰でも平等に高度な教育がオンラインで受けられるようになります。また、身体が不自由であったり、高齢で動くことが困難になったりしても、バーチャルでの旅行や、友人との仮想店舗でのショッピングも可能になります。さらには、実際に行くことが困難な海中や宇宙空間での作業をリモート操作で行うことも夢ではありません。

リアルとバーチャルの両方の移動を組み合わせ、突き抜けた発想で新しい世界を創造することが求められているのです。



自然生態系に調和するモビリティ

地球と共生するモビリティ

人類は近代文明への進化との引き換えに様々な環境問題を残しています。自動車や飛行機を中心とした移動によって排出されるCO₂も地球環境に大きな影響を与えています。CO₂をはじめとする温室効果ガスによる地球温暖化は、人類や



その他の生物にとって最大の危機をもたらしています。このままでは海面は、21世紀中に最大82cm上昇すると予測されています。

International Energy Agencyなどの調査によると、2012年の世界のセクター別CO₂排出量では、運輸が全体の23%を占めており、地球全体の生態系の持続可能性を考えたとき、モビリティの排出ガス抑制は最重要課題の一つと言えます。

そのような中、運輸業界ではCO₂削減の取り組みが進んでいます。省エネカーの導入促進やドライブレコーダーを活用したエコドライブ促進に加え、今後は、カーシェアリングの普及、自動運転化やモビリティ・マネジメントによる渋滞の軽減、サービス連携によるマルチモーダル化により、最も環境負荷が高い自動車のCO₂排出量低減が期待されます。エコ通勤などによる「環境的に持続可能な交通(EST: Environmentally Sustainable Transport)」の実現は、具体的な取り組みの一つです。将来的に、大気汚染物質を出さない自動車(ZEV: Zero Emission Vehicle)に置き換われば、劇的なCO₂削減が実現できます。イギリスやフランスで2040年までに、インドで2030年までに新車販売のZEV率100%を

目指すなど、各国で取り組みが始まっています。

自動車の次にCO₂排出量大きい飛行機は、今後ますます、台数・便数が増加します。ノルウェイの航空・空港管理公社は、国内を発着する短距離路線の全便を2040年までに電動航空機に完全に切り替える計画を発表しています。大手航空機製造企業もハイブリッド機の開発に取り組んでいます。

このように完全ゼロエミッション化を目指した取り組みが加速し、地球の自然生態系とモビリティが共生することで、人類は持続可能な移動能力を手にすることができるようになるでしょう。

富士通とモビリティの未来

Collecting, Connecting, Utilizingの3領域で貢献

ここまでモビリティの6つの潮流についてお話ししましたが、共通して言えることは、移動をする様々な目的に対して、私たちに多様な移動手段が与えられるということです。これらに加えて、各業界に属する企業や組織がデジタル技術でつながった新しいエコシステムを形成し、ヒューマンセントリックなモビリティ社会を共創することによって、モビリティの未来が実現されていきます。富士通は長年のICTの経験を元に、Collecting(データを集める)、Connecting(ネットワークにつなげる)、Utilizing(データを活用する)の3領域でヒューマンセントリックなモビリティの未来を実現します。

Collecting領域においては、自動車がネットワークにつながることで大量のデータが発生しますが、その管理コストの低減とデータ処理の高速化が大きな課題です。そして、コネクテッドカーからのデータは、今後画像データの占める割合が高くなると言われています。この課題に対して、富士通は自動車の画像データを従来方式と比較して大幅に軽量化して送信する技術、および、自動車側に軽量化前の画像データを分散管理し、必要に応じてセンター側からオンデマンドでデータ収集する技術を開発しました。これらの技術により、

通信とストレージにかかる費用負担を大幅に低減することが可能になります。さらに、車両とセンターでの画像や映像の送信が行いやすくなり、大量のデータを扱う新たな損害保険サービスや安全運転サービス開発にも貢献することが期待されます。

Connecting領域では、富士通がこれまで携帯電話の開発で培った経験を活かして、自動車の無線ネットワークを経由したソフトウェアのダウンロードや更新を実現します。これにより、ユーザーはソフトウェアのリコールが発生した場合でもディーラーに自動車を持ち込むことなく、ソフトウェアの更新を行うことができるようになります。また、富士通は、センターを介さず無線基地局を通じて近くの自動車同士が通信する技術を活用し、安心安全なモビリティの迅速なご提供を目指します。

Utilizing領域では、各車両や外部から収集したデータ(実世界の事象)をバーチャル空間に再現するMobilityデジタルツインの基盤開発を行っています。この技術により、シミュレーションや各種機能向上、改善が可能になります。これにより、自動車の開発段階における品質評価を高精度かつスピーディーに実現し、また、モビリティ社会を支える新たなサービスの提供を可能とし、事故のない安心で持続可能な社会の実現を目指しています。

Mobility社会を支える富士通のテクノロジー



3 Over the Airの略で無線ネットワークを経由して自動車のソフトウェア・車載セキュリティ・マップ・個人の嗜好性を配信する技術。

4 Multi-access Edge Computingの略で、データセンターを介さずに無線基地局を通じて近くの自動車同士が通信する技術。



コネクテッドカーから集められた大量のデータは、今後、業界を超えてサービスの開発に活用されていきます。富士通はAIなどの最先端のデジタル技術を駆使して様々な業界の顧客やパートナーとともにデータを活用し、より豊かなモビリティ社会の構築に貢献します。

人々の心に寄り添う自動運転とそのルール作り

自動運転の技術開発と合わせて重要になるのが、人々が自動運転を受け入れ、無理なく共生していくための活動です。生活の中に自動運転が入ってきたとき、人々が自然に受け入れ、信頼するとは考えにくいとされています。自動運転が生活の中に溶け込んで生活を豊かにするため、啓蒙活動や教育が重要になっていきます。

また、このような新しいモビリティ社会実現に向けては法整備やルール作りも大切になってきます。現在は、産官学が知恵を出し合い、業種をまたいだ議論が行われている段階です。富士通もその一員として、新しいモビリティ社会の構築に関わっていきます。

共創が実現のカギ

100年に一度と言われる業界再編の中、自動車および周辺産業は、目まぐるしいスピードで変化を遂げています。世界的にオープンイノベーションも一般化し、各社が得意な分野を持ち寄って共創(Co-creation)することで、イノベティブなソリューションやサービスが生み出されるようになりました。富士通も、モビリティ関連業界はもちろん、様々な業界の皆様と共創することで、持続可能で人々の生活を豊かにするモビリティ社会の実現に貢献していきます。

富士通株式会社

〒105-7123 東京都港区東新橋 1-5-2

汐留シティセンター

電話: 03-6252-2220(代表)

0120-933-200(富士通コンタクトライン)

<http://www.fujitsu.com/jp/>

商標について

記載されている製品名などの固有名詞は、各社の商標または登録商標です。

将来に関する予測・予想・計画について

本冊子には、富士通グループの過去と現在の事実だけでなく、将来に関する記述も含まれていますが、これらは、記述した時点で入手できた情報に基づいたものであり、不確実性が含まれています。従って、将来の事業活動の結果や将来に惹起する事象が本冊子に記載した内容とは異なったものとなる恐れがありますが、富士通グループは、このような事態への責任を負いません。読者の皆様には、以上をご承知いただくようお願い申し上げます。

「モビリティの未来」の一部または全部を許可無く複製、複製、転載することを禁じます。

©2019 FUJITSU LIMITED